

# プロローグ



## 誕生

柴又帝釈天は立春前で冷え込んでいたが、参道前はうなぎやお団子におせんべいの匂いがたまらなく空腹を刺激する。母・相田菜美子は鎌倉小学校から2軒先のマンションから散歩して来ている。(今日は【高木屋】でお昼ね)と8か月に入ったお腹の赤ちゃんを決めていった。(茶飯はシンプルで美味しい、おでんも大きいね)と優しい菜美子の声を聞き、赤ちゃんは少し体を丸めヌクヌクと幸せなときでもある。間もなく狭い産道を通って人生最初の呼吸をするとは、知る由もなかった。しかし、桜の開花が近づくと早産の兆候が出てしまった。

医師や看護師は慎重に、若い妊婦だが落ち着きのある菜美子25歳の様子を見守り35週目以降までは赤ちゃんに頑張ってほしいと願っていた。

安静にしながら38週目に入るといよいよ産気付き、「ママと一緒に呼吸して、頑張ろう」としきりに、声をかけ無事を祈り続け自然分娩に臨んでいった。

「おめでとうございます。相田さん、女の子です。命の門出ですね」

派手さのない下町の産婦人科では必ず赤ちゃんが誕生すると、長くつらい時間を耐えた、新米ママにお祝いと労いを込めメッセージを贈るのだった。

早産の恐怖から解放され安堵した心に【命の門出】は、素晴らしい言葉の響きだった。仕事帰りに駆けつけた、夫・相田俊介と喜び合い短い面会時間を楽しんでいた。

まだ新生児集中治療室（NICU）の治療で、保育器の中で寝ているが、堂々と万歳姿で寝ていた。

「ねえ、あなた。窓の外を見て、桜の舞が雪のように見えるの」と、まだかわいい笑顔が残る菜美子が話しかけていた。

「うん」

「名前。雪菜か桜は、どうかしら？」

「いいなあ、美しく散る桜より、雪菜の方がしつかり天地と触れ合っている感じがする」と話してくれた。

「そうですね、天地との関わりこそ、人生そのものかもしれないですね」

「相田雪菜。かわいいじゃないか。誕生プレゼントなんだが、寅さんに憧れこの土地で暮らした  
だろ」

「はい」と返事をしながら、(帝釈天に安産祈願へ行っただわ) と思い出し笑いをしていた。

「荻窪にいい物件を見つけたんだ。学校選択も多くなるし、妹や弟ができたときのことも考え、決  
めようと思っている」

「まあ、豪華なプレゼントですね。嬉しいです」と明るい笑顔がはじけ菜美子は新米ママとしてデ  
ビューを果たしていった。

新居に移る前に雪菜の祖母・酒井つる子が住んでいる山梨で、産後の体を休めながら3週間ほど、  
ゆっくり過ごしていた。

つる子は長い間ジュエリーの金属加工の講師として働いていたが、60歳を境に臨時職員になつて  
いた。

「雪菜の誕生は、死んだ静太じいちゃんも喜んでるわね」

「じいちゃんのカレー、食べさせたかったですね。雪菜も2歳ぐらいになったら、もりもり食べた  
でしょうね」と菜美子とつる子は、メルちゃん人形に興味を示している雪菜を目で追い、昔を懐か

しんでいた。

その後も菜美子は、体調不良が続き、時折山梨に遊びにきていた。

雪菜は3歳の頃になると、言葉も片言で話し、走り回ることができ、かわいい盛りになっていった。大きな漬物石に興味があるのか、ほおをすり寄せなでると、しまいにはマジックペンの赤で、いびつなアンパンマンを書いたりしていた。

「あらっ。かわいいつけものいしね、えがじょうずだね」と、つる子がほほ笑むと、「うん」と、笑う顔こそがアンパンマンで、怒ることもできなかった。

時折、指輪を親指にはめ、虎目石のネックレスをつけることをおねだりし、「きれい、きれい。このとらさんだいき」と、つる子に抱きつき、虎目石がお気に入りだった。

「金運の石が好きなんて、大したもんだ」と話していると、ちゃっかり雪菜が膝の上に乗る、そのお尻は漬物石の重さぐらいで（可愛い）とつる子は甘い思いに、気持ちが若返っていった。こうして自然にジュエリーと戯れることで優しさや、感受性が身についていったのだった。

ジュエリーに対する意識は家族全員が高く、その靈力に近い力も信じていた。

桜色・新緑色・秋色・雪色の絵具で天を描いたような大自然の中で御岳昇仙峡は、水晶発祥の地として、君臨し続けていた。

大自然の山梨に眠る神々の石は良質で美しく「山梨ジュエリー」として、存在感を輝かせ続けていた。